

中世ユダヤ聖書解釈における巡礼： アバルヴァネルを中心に¹

平岡光太郎

一神教学際研究センターリサーチフェロー

1. はじめに

本稿では、イツハク・アバルヴァネル² (Isaac Abarbanel, 1437-1508) の聖書解釈における、「巡礼」の在り様を明らかにすることを目的とする。まずイツハク・アバルヴァネルを紹介し、彼の巡礼を扱う聖書解釈を確認したのち、考察を加える。

2. アバルヴァネルについて

イツハク・アバルヴァネルは 1437 年にポルトガルのリスボンで生まれた。ラビ・ヨセフ・カローは、アバルヴァネルがラビ・イツハク・アブハブなどの賢者から学んだことを指摘している (*Kesef mishnah*, *Hilkhoh Berakhot*, 3 : 5)。聖書とその注解、ハラハーやアガダーに精通したのみならず、ユダヤ哲学、さらにはラテン語、カスティリヤ語、ポルトガル語を学び、そして多少ギリシア語とアラビア語を知っていた可能性もあるとされる (*Shmueli* p.23)。

アバルヴァネル家は、ポルトガルにおいて商業、銀行業に従事し、宮廷における徴税人、出納管理者として仕えており、イツハク・アバルヴァネルも宮廷に出入りするようになる。彼が 45 歳の時に、王位継承をめぐる王宮内が 2 つの勢力に分かれた。アバルヴァネルの友人がいた勢力がこの政争に敗れ、勝利したジョアン 2 世は国王反逆罪を理由に関係者を次々に処刑した。アバルヴァネルは敗北した勢力への加担を疑われたため、スペインのカスティリヤに政治亡命した。この時期にヨシュア記、士師記、サムエル記の注解を書き、1484 年の 3 月の中頃、列王記注解の執筆の際にフェルナンド 5 世とイサベルとの謁見のために召喚された。アバルヴァネルは徴税を担当するようになり、中央部と南部という重要な地域の担当を任命された。彼は国庫に巨額な額を貸し付けたが、その中でも特に大きかったのは 1491~1492 年のグラナダ戦争の必要に際しての貸し付けであった。レコンキスタ終了後の 1492 年 3 月 31 日、スペイン

中世ユダヤ聖書解釈における巡礼：
アバルヴァネルを中心に

にいる全ユダヤ人に追放命令が出された。王達によりアバルヴァネルはスペインに留まることを勧められるが、この王からの勧めを断り、7月上旬にヴァレンシア港からナポリに向かった。

1492年9月22日、カスティリヤで始めた列王記の注解をナポリの地で書き終えた。ナポリでも王家に仕えるが、1494年のシャルル8世率いるフランスのナポリ占領の際に家が略奪され、ナポリ王室と共にシチリアのメッシーナに向かい、ここで1495年6月まで過ごした。彼はその後モノポリにあるアプリアに向かった。1496年にリスボンで書き始めた申命記注解を書き終えた。この時期に彼の時代の出来事をメシアの苦難と注解する、つまり贖いへの希望についての3作を記した。

1503年、彼が最後にたどり着いたのは共和制のヴェネツィアであった。当時、地中海における香辛料貿易を一手に担っていたヴェネツィアは、ポルトガルがアフリカを回るインド航路を発見したことに大きな衝撃を受けた。その同じ年、このような状況下にアバルヴァネルはヴェネツィアとポルトガルの外交交渉の仲介役に立った。1505年、このヴェネツィアにて、彼の晩年の作品の一つである出エジプト記注解を書き上げた。1508年、イツハク・アバルヴァネルはヴェネツィアにて没し、パドヴァに葬られた。

次節では、巡礼についてアバルヴァネルによる言及が見られる聖書の箇所を確認したのち、彼の聖書注解を考察する。

申命記 16章 9～12節、16～17節³

「あなたは七週を数えねばならない。穀物に鎌を入れる時から始めて七週を数える。そして、あなたの神、主のために七週祭を行い、あなたの神、主より受けた祝福に応じて、十分に、あなたがささげうるだけの収穫の献げ物をしなさい。こうしてあなたは、あなたの神、主の御前で、すなわちあなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所で、息子、娘、男女の奴隷、町にいるレビ人、また、あなたのもとにいる寄留者、孤児、寡婦などと共に喜び祝いなさい。あなたがエジプトで奴隷であったことを思い起こし、これらの掟を忠実に守りなさい。…男子はすべて、年に三度、すなわち除酵祭、七週祭、仮庵祭に、あなたの神、主の御前、主の選ばれる場

所に出ねばならない。ただし、何も持たずに主の御前に出てはならない。あなたの神、主より受けた祝福に応じて、それぞれ、献げ物を携えなさい。」

まずアバルヴァネルは、なぜこの申命記の聖書箇所において、祭日の期日に関する記述があるかということの問題とする。彼はナフマニデス⁴による「会見の戒律」(מצות ראיה)の解釈に言及する。それによると、古代イスラエルの三大祝日の際にイスラエルの人々が選びの家で神前に赴いていたため⁵、過越祭の期日の説明をした後に、七週祭においても期日の説明することが求められた。つまり、七週祭は過越祭に近接した祭りなのだ。このためその期日は、過越祭から7週後にあたり、50日目は「我が宝」(סגולתי)になるのだ。「祭司たちに告げよ」のパラシャ⁶(レビ記23章9～22節)において、祭りの期日についてはすでに説明されている。しかし、この申命記の箇所では、さらに3つの事柄が説明される。その一つは、和解の献げ物と随意の献げ物であり、これについては、「あなたの神、主より受けた祝福に応じて、十分に、あなたがささげうだけの収穫の献げ物をしなさい」(申命記16章10節)と語られている。そしてラビたちハギガ8aで語ったように、「最初の食事はフリ⁷からで、次の食事はマアセル⁸からである。そして残りのすべては、マアセルからである」。そしてブシャット⁹に従い、アバルヴァネルは次のように考える。つまり、祭日の期日が語られる必要があったのは、七週祭であり、過越祭ではなかった。なぜなら過越祭において、人はその時期までに彼が収穫したもののうちから、マアセル、満願の献げ物、随意の献げ物、家畜の初子¹⁰を持参したのである。アバルヴァネルによれば、過越祭から七週祭まで、おそらく彼には神殿に持参するためのマアセル、家畜の初子、満願の献げ物はなかった。なぜなら、さほど時間の経っていない過越祭において彼はそれらをすでに持参してしまったからである。このため、この祭りにおいて以下のように言及する必要があった。「あなたがささげうだけの収穫の献げ物をしなさい」(申命記16章10節)。そして持参するマアセル、祭司たちへの初子の献げ物、焼き尽くすための満願の献げ物や和解の献げ物を彼が持ちえないにも関わらず、彼には祭りの献げ物(שלמי החג)を持参して、献げることも認められている。

このためこの七週祭について以下のように命じている。「こうしてあなたは、あなたの神、主の御前で、すなわちあなたの神、主がその名を置くために選ば

中世ユダヤ聖書解釈における巡礼：
アバルヴァネルを中心に

れる場所で、息子、娘、男女の奴隷、町にいるレビ人、また、あなたのもとにいる寄留者、孤児、寡婦などと共に喜び祝いなさい」（申命記 16 章 11 節）。この「喜びなさい」という戒律は、過越祭で命じられていないとアバルヴァネルは説明する。なぜなら過越祭では多くの犠牲が捧げられることから、「財産が増せば、それを食らう者も増す」（コヘレトの言葉 5 章 10 節）とあるように、食料と祝宴があるその場所には、必然的に喜びもあるからである。しかし、献げ物から持ち出せるものがない七週祭では、そこで喜ぶために持っている物から持参し、このために支出を減らさないように命じる必要があった。あなたとあなたの息子、娘、男女の奴隷、町にいるレビ人、また、あなたのもとにいる寄留者、孤児、寡婦は過越祭において喜ぶだろう。なぜならそこには「多くの産物と献げ物」（רבויו ההטבה וההקדשות）があるからだ。アバルヴァネルによれば、これについてもモーセは以下のように説明する。「この祭りの日々における喜びの戒律なのである」。そして彼はここでさらに「巡礼」（עלייה ברגל）について、「あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所」（申命記 16 章 11 節）において実施されると説明する。なぜならこの箇所に至る前に、楽しみについては言及されていないからである。

この巡礼はイスラエルの人々にとって大きな労苦であった。なぜなる、過越祭後に家へと帰ったあとに、大部分の民衆は、七週祭のためエルサレムへと戻ったからである。あるいは、過越祭から七週祭までそこに居残った人々もいたであろう。この時期は収穫にあたり、皆が畑にいるので、人々の心は収穫へと向けられている。そしてまた次から次へとかさむ多くの支出のため、彼らには、献げ物からでない、「日常のもの／俗のもの」を食べることが認められた。このためにこの祭りについては特に以下のように言及される必要があった。「あなたがエジプトで奴隷であったことを思い起こし、これらの掟を忠実に守りなさい」（申命記 16 章 12 節）。つまり、アバルヴァネルによれば、この祭りの労苦を悪としないことが重要である。そしてアバルヴァネルは次のように説明する。

エジプトで奴隷であり、労苦があり、祝福も少なかったことをよくよく思い起こしなさい。あなたがこのことを真に思い起こすとき、これらの法を守り、行うことができる。これらの法に意味が無いようにあなたの目に見えたとしても。なぜなら、エルサレムでの滞在であなたにもたらされる

のは、労苦でなく、喜びだけなのだから。あなたのエジプト脱出のように大きな恵みを授かった者は、彼をそこから救出した方への礼拝に努力することが当然であり、そのお方に感謝を捧げに幾度も訪れ、何度も喜ぶのである。(Abravanel 1999, p. 243 – 244)

3. 考察

この申命記の箇所ではアバルヴァネルがまず問題としているのは、巡礼が実施される三大祝日の時期である。過越祭と七週祭のあいだの期間は短く、過越祭で準備できたように、七週祭において献げ物を準備できない状況を心配している。ここでのアバルヴァネルの懸念は、経済的な問題であり、宮廷の出納管理者であったアバルヴァネルらしい聖書解釈と言える。こうして、彼は、申命記 16 章 9 節以降の七週祭の説明において存在する様々な人々（息子、娘、男女の奴隷、町にいるレビ人、また、あなたのもとにいる寄留者、孤児、寡婦）についても、献げ物の準備という観点から、申命記 16 章 1～8 節の過越祭の記述との違いを説明するのである。

アバルヴァネルは七週祭における巡礼が民の重荷となっていたことを認めるが、出エジプトの故事を思い起こすことで、その重荷は負担とならないとする。ここで筆者は出エジプトの出来事を「故事」と表現したが、アバルヴァネルは「あなたのエジプト脱出」と表現していることから、その体験を祖先だけものと限定していないことが伺える。このような「祖先の出エジプトの体験を自分のものとする」という思想は、アバルヴァネルだけに見られるものでなく、ユダヤ教内で広くみられる特徴である¹¹。

本稿では、アバルヴァネルの申命記 16 章 9～12 節にみられる巡礼についての聖書解釈を取り上げた。上述したように、アバルヴァネルの関心は「巡礼」自体より、聖書自体に含まれる不明瞭な点の解説（過越祭にない説明が、なぜ七週祭にあるか等）、それに伴う献げ物の法実施にある。本稿で扱った箇所では、どのような状況であろうと巡礼において喜びを見出すということがアバルヴァネルの特徴として理解できる。

なおアバルヴァネルには、出エジプト記 23 章などにも巡礼に関する記述を見つけることができる。これらについては今後の課題とする。

中世ユダヤ聖書解釈における巡礼：
アバルヴァネルを中心に

参考文献

Abravanel, Isaac 1997 *Perush ha-Torah / le-sefer Shemoto, Yitshak Abravanel 'al pi defus rishon ye-khitve yad*, me-et Avishai Shotland, Yerushalayim Horev.

Abravanel, Isaac 1999 *Perush ha-Torah / le-sefer Devarim, Yitshak Abravanel 'al pi defus rishon ye-khitve yad*, me-et Avishai Shotland, Yerushalayim Horev.

Abravanel, Isaac 2007 *Isaac Abravanel : letters / edition, translation and introduction by Cedric Cohen Skalli*, Berlin ; New York, Walter De Gruyter.

Shmueli, Ephraim 1963 *Don Yitshak Abarbanel ye-gerush Sefarad*, Jerusalem, Mosad Byalik.

Leiman, Shnayer 1968 "Abarbanel and the Censor", *Journal of Jewish studies*, Vol.19.

-
- ¹ 本稿は、2021年10月23日に実施された、第3回 CISMOR リサーチフェロー研究会、ユダヤ学研究部門「シオン／エルサレム・聖地観の再検討：聖書テキストから今日に至るまで」における発表内容を加筆修正したものである。
 - ² アバルヴァネルの表記については諸説がある。エリヤウ・レヴィータ (Elijah Levita, 1469-1549) は *Sefer HaTishbi* (1541) の中で、アバルヴァネルのことを 'Abarbanel' と表記している。しかしハインリヒ・グレーツ (Heinrich Graetz, 1817-1891) やイツハク・ベエル (Isaac Beer, 1888-1980) などの近代ユダヤ学者は伝統的に 'Abravanel' (アブラヴァネル) と表記する。語源的な名前の由来については不明であることが Shnayer Leiman によって指摘されている。Shnayer Leiman, "Abarbanel and the Censor", *Journal of Jewish studies* (United Kingdom, Oxford Centre for Hebrew and Jewish Studies, 1968), vol. 19, p. 49. 本稿においては、この Leiman の著作のタイトルの発音に、さらにヘブライ語表記のダゲッシュを反映させた「アバルヴァネル」を使う。
 - ³ 日本語の聖書の箇所は新共同訳聖書より引用した。日本聖書協会『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987年。
 - ⁴ ナフマニデスはヘブライ語で呼称されるとき Ramban と発音され、これはラビ・モシェ・ベン・ナフマン (Rabbi Moshe ben Nachman, 1194-1270) の略称である。彼は1267年にエルサレムへやってきて、そこでシナゴグを建てた。
 - ⁵ 「あなたは、主がその名を置くために選ばれる場所で、羊あるいは牛を過越のいけにえとしてあなたの神、主に屠りなさい」(申命記16章2節)。
 - ⁶ ユダヤ教では、毎週、トーラーの朗読箇所が決まっている。ここでは「パラシャ」は、「朗読箇所」を意味する。

-
- 7 「聖別されていない捧げもの」であり、ミシュナ以降のラビ文献に登場する概念。「聖別されていない捧げもの」という訳については、以下を参照した。石川耕一郎『ミシュナ タアニート、メギラァ モエード・ハカタン、ハギガァ』エルサレム文庫、1986年、197頁。
 - 8 全収穫のうちの十分の一でレビに捧げる。民数記 18 章 26 節などを参照。
 - 9 「字義どおりの意味」という名詞である。
 - 10 「家畜の初子は生まれたときから主のものであるから、それが牛であれ、羊であれ、だれもそれをささげることにはできない。それは主のものである」(レビ記 27 章 26 節)。
 - 11 過越祭で読まれる「ハガダ」(出エジプト記の縮小版のようなもの)の中にもこのような思想を見つけることができる。